

昭和三十六年四月十五日三月行第

(每月一回・十五日発行) 可

(通第一四五号)

慈

光

次 目

- | | |
|----------|-----------|
| 祖聖の七百回忌に | 花田正夫：(1) |
| 親鸞聖人の眞面目 | 近角常觀：(5) |
| 晩年或る日の聖人 | 福島政雄：(15) |
| 報恩の生活 | 三瓶徳英：(20) |

祖聖の七百回忌に

花田正夫

幸にも祖聖の七百回忌にめぐりあいました。年頭から
いかにして祖師むかえればや 七百忌
と、心はずむものがありました、米国からも団体で参詣
されるという通信もうけて心待ちにして居りますが、私自
身は、京洛の賑わいを他所に、草庵に閑居して、念佛裡に
祖聖をおむかえ申して居り、この思いの一端を誌上に述べ
させて頂きます。

一世の久遠の
新

万物流転の世につて、遠ざかればうとんじ、離れゝは忘れ去るのが、きびしい世の鉄則であります。それなのにこの鉄則に逆行して、遠ざかれれば遠ざかるほど鮮やかに、離れゝば離れるほど懐しいものがあります、それは親の存在であります。その膝下に居る時よりも、遠く故郷を離れ更に在世の時よりも親亡きあとに、いよ／＼追慕の情の深まるものであります。

顧みれば、祖師聖人の存在も、御在世の時は殆んどせぬ

「絶」といは、常と訓ず。聖人の教はまた時移り俗を易う
といえとも、先聖、後賢、その是非を改む能わず」とあり
『十七憲法』には「何れの世、何れの人かこの法を尊ばざ
らん云々」とあります。外憂内患、御心のやすまる時もな
い時代の太子となられて、永遠なる法のひかりを発見され
た御よろこびは如何ばかりであります。國境を超えて、民
族をこえ、さらに時代を越えた、法の不滅
のひかり、その永遠の相のもとに立たれる太子にして、千
三百余年の今日、太子の実語は金色燁然として、人の世の
燈炬となつて下さるのであります。

我なくも法はつきまじ和歌の浦の

三、無私なる聖徳

青草人のあらんかぎりは

凸凹のない、曇りのないガラスを通して、外界の景色はゆがめられず、そのままに映つて来るよう、無私なる人をとおして、仏の真実と、世間の虚偽さが、そのままに知らされます。私共は聖人をして、直かに仏心と七祖の真心に触れ得ると共に、我身の虚偽不実さも照し出されるのであります。

無私なる人の声は、御自身のことを表白されているまん
まが、私共のこと自然に転ずる不思議さがあります。
そこに信仰のことばは、聖人の仰せをそのまま我身の上に
あてて味わねば、宝の山に入つて手を空しくして帰ること
になります。「親鸞一人がためなりけり」の声は、そのま
ま「花田一人がためなりけり」なのであります。

に導かれて、三朝淨土の大師の玄意を得られた祖師聖人は「親鸞私なし」「ただよき人の仰せをこうむりて信するほかに別の子細なし」「親鸞弟子一人も持たず」「唯可信斯高僧説」「愚身の信心かくの如し」等々、無私のみ心をもつて、大法を伝承し、じよう己証して下さつたのであります。この無私なる人の眼によつてのみ、永遠なるひかりは徹見され、地に光被せられるのであります。

真の永遠ということは、唯時間的に永いということでなく、時間と空間を超えるところに、永遠なる現在として感知されるのであります。即ち無私なる人の前にひらける自然の妙境界であります。

して仰ぐべく、信すべきであります。

太子と聖人の如く無私的人にして、何百里、何百年の時と所をこえてその信を自然法爾に一つにされるものであります。そこに、我執、我情、我慢、我見、に立つ者は、無私なる人の言葉を是非することは出来ません、唯己を空しくして仰ぐべく、言はずべきである。

ら忘れられ、近く明治の初期には親鸞^{まつさるらん}抹殺論まで出た程であります。然し寺かれた種は必ず生え、眞実は信説を縁として必ず建現^{けんげん}してやみません。一度思いを遠く七百年の昔に走せます時、灑々として、その眞実さが知らされます。たとえば、源頼朝公をあげますと、征夷大將軍として三歳児も泣くのをやめる程の大勢力であります。然し聖人は一寒僧として寺さえも持たれぬ御生涯であります。ところが、星霜流れて七百年の今日、鎌倉の頼朝公の墓前に立つ旅人は、夏草や武者共の夢が跡^{あとひど}を痛感せしめられ、京都の聖人の廟前には何万の人々^{ひとども}が心から恩徳を謝し、そのあとをたつどころか、いよいよ^{さき}熾んであります。まこと、聖人は世の久遠の父であります。私共の眼はとかく横に広くひろがつた生活に幻惑され勝まさりますが、本当の尊さは、縱に何時までもつらぬく生命でありますよう

無私なる人の親切は、そのまゝ仏の大慈大悲につながるものがあります。友人の非を見ても仲々直言するには勇気があります。まして身びいきの強い私共には、友人の怒りと非難をおそれますけれども、兄弟となり親子となれば、段々とはからいを超えて忠言するものであります。然しこうした親切は段々深く強くなりますが、矢張り限りある身の悲しさには行き詰つて了ります。ここにそうした人間的親切をすべて、どうにもならぬ業報の上に、「我能く汝を護らん」の大慈大悲心を仰いで、その業報から逃げず、あせらず、絶望せず、そのままうけて行く人の上に、月影が水面に映る如く、仏心が形にそよ影としてあらわれるものであります。そして、それがそのまま月明りとして地上の闇を照すのであります。

聖人の九十年の御生涯は、波瀬方丈の業報の限りをつくされたものであります。さればひとえに親鸞「弥陀の五劫思惟の願をよくく案すればひとえに親鸞一人がためなりけり。さればそくばくの業を持ちける身にてありけるをたすけんと思し召し立ちつる本願のかたじけなさよ」

「わろからんにつけてもいよく願力を仰ぎまいらせは自然のことわりにて柔和忍辱のこころもいでくべし、すべて往生にはかしこき思いを具せずして、ただほれど

と如來の御恩の深重なることをつねに思い出しまいらすべし、しかれば念佛も申され候、これ自然なり、わがはからわざるを自然とは申すなり云々」煩惱の騒音のはげしければはげしいほど、いよいよ涅槃かえれる念佛の妙音に、私共の心もひき入れられ、和げられ、撮められるのであります。

無私人の心は、来るものをこばまず、去る者を追わぬ如来の大悲の光耀の下に、離合因縁にまかす徳風があります。そこにこそ私共の粗末な心もそのままに受け容れられます。離れる者も何時かは仏恩にかえらされるのであります。

四、外は賢・内は愚

聖人八十八歳、地上の筆の書きおさめとも申すべき『自然法爾章』に、「是非しらず邪正もわかぬこの身なり。小慈小悲もなけれども、名利に人師このむなり」とあります。ここに、聖人御自身の告白とされては、無私どころか、名利に人師このむ身である、傷むべし、悲しむべし、と念佛申されたことでありましょう。そこに本当の無私なお姿が拝されるのであります。「我は無私なり」と大言する者こそ、無私という我執にしばられた人であります。

聖人の晩年の書『愚禿鈔』の上・下二巻の劈頭に

「賢者の信を聞きて、愚禿が心を顯わす。

賢者の信は、内は賢にして外は愚なり。
愚禿が心は、内は愚にして外は賢なり。」

と繰り返して、慚愧していられます。これこそ、恩師法然は、十惡、愚痴の法然房と名告られ、源信僧都は、余が如き頑魯の者、と告白され、善導大師は、自身は現に罪悪生死の凡夫、と深信せられているのに、自分の姿は、何處までも、内が愚であるが故に、外は賢を振舞う心のやまぬ者である。実にあさましい愚禿そのものである、との表白であります。それは、からつぱの稻の穂が、どうあつても頭を下げぬように、よき師の教化を蒙りながら、教え甲斐のない、不遜の弟子でありますとの慚愧であります。

私はここに種々教えられるのであります。法然聖人の御弟子の主だつた方々が三百八十人と伝えられます。そのうち「我こそ聖人の玄意を正しく伝承せり」と思いなした人々の中に、一念多念の争いがあり、専修雜修の論がおこつてゐることであります。独り親鸞聖人は、弟子甲斐の無い師にそむきづめの身であるという、そこに我がはからいて地獄におちたりともさらに後悔すべからず候」の信順があつたのがあります。

阿闍世王が、自らの大逆に気づき、大煩悶におちた時、

「善哉、善哉。大王大惡をなすと雖も慚愧の心あり。慚愧無き者は人と名けず畜生と名づく。慚愧あつて始めて親兄弟あることを知る」と菩薩大臣がたたえております。即ち、「我よし」の立場では、一切を我流で判断していく、それが絶対に正しい、それに反する者は愚者である、と云う邪見橋慢の人であります。聖德太子はこれをきびしく諭められて「共に是れ凡夫のみ」と示されました。ここにそういう自己の邪見と橋慢に気づく時、自我の見解をすてて、己を空しうして見る、そこに、眞実の親兄弟の姿が現れて来るのであります。そうでない時は、親も兄弟も、自分に都合のよい時はよしと見、不都合の時は邪魔物あつかいするので、恰も火鉢同様の扱いで、冬は有難く、夏は邪魔となるのであります。ここに大慚愧の人にして始めて上下の秩序と左右の別が何の無理もなく自然に知らされるのであります。

外賢にして、内愚なり、の祖聖の声、名利に人師このむなりの御文を繰り返して心に誦しまつりつづります。

本師源空いまさずば
如來大悲の恩徳は
　身を粉にしても奉ずべし
　骨を碎いても謝すべし。

本師源空いまさずば
　身を粉にしても奉ずべし
　骨を碎いても謝すべし。

親鸞聖人の真面目

近角常観

一、拯済無辺極濁惡

親鸞聖人の真面目という事について讃仰して見たい。眞面目といふ言葉は、十分適當な言葉ではないが、その意味

は、これを世間的に言えば、聖人の全人格を通じて、聖人の聖人たる真精神とでも申すべき事である。これを信仰的に言いかえれば、聖人満九十年の間、御胸中に常にたくわえたまいし、御信仰の真髓は何であるかといふことである。勿論、如何なる言葉をもつても言いあらわし得るであろう。されど私は「拯済無辺極濁惡」という一句をもつて、聖人の真面目を仰ぎ奉ることができるとおもう。

そもそも『教行信証』は聖人の御自督である。その中ににおいて『正信偈』は、その御自督中の骨目を告白せられたものである。しかも「無辺の極拯済を濁済し給う」の一句は、最後の総結にして、聖人の全信仰を尽くされたものである。

全体「真宗」という言葉は、聖人の開闢したまいし宗旨の名となつたけれども、聖人御自身においては、これ法然聖人の教にして、さかのほつては、三国の祖師の教のまゝである。

さればこそ『正信偈』の法然聖人の章に「真宗の教証を片州に興し、選択本願を惡世に弘む」と言い、又『化身土巻』には「四依の弘経大士、三朝淨士の宗師、真宗念佛を開き、濁惡邪偽を導きたまう」とある。すなはち平太郎に対する御教化にもあるごとく、「三国の祖師、おののこの一宗を興行す。この故に愚禿すずむるところさらに私なし」というが聖人の御精神である。その「弘経大士、宗師等」のおしえたまう真宗の骨目は「無辺の極濁惡を拯済したまう」の大德音である。

「愚禿、釈の親鸞、慶ばしいかな、遇い難くして今遇うことを得たり、聞き難くして今聞くことを得たり」と、この真宗の教行証を敬信せられた自督のありなりが、實に「無辺の極濁惡を拯済したまう」である。

これ三朝七祖の教のままである。愚禿一点のわたくしを

加えたものではない。弥陀の本願のままである。法然聖人の仰せのままである。

ゆえに「道俗時衆共に同心に、唯この高僧の説を信すべし」と仰せられたのである。

かくの如く頂ききたれば「拯済無辺極濁惡」の大德音は聖人の胸中に宿りたまえる弥陀の本願、三国の祖師の開きたまし真宗そのものである。言いかえれば、聖人一点の私を離えざる全信仰の真面目である。

いしことを云々

とある。実にこの「親鸞一人がためなりけり。さればそくばくの業をもちける身にてありけるを」の一語が「拯済無辺極濁惡」の真の味である。聖人は弥陀の本願をもつて、人のためとは思し召さぬ。そくばくの業をもちける親鸞一人がためなりけりと、且は懺悔し、且は感謝したまうたのである。

この親鸞が、曇劫以来、罪惡生死に苦しみつゝあるがために、五劫永劫の御苦勞をかけたのである。この五劫永劫の御苦勞も、この罪惡嚴重の親鸞一人をお目當である。親鸞なかりせば、いかでか如來にかくの如き御苦勞をおかけ申すべき。如來なかりせば、親鸞いかでかくの如き救いを蒙るべき。

実際にこれ、聖人御自督の生粧である。善導大師の二種深心のまゝである。さればこそ『歎異抄』の次の文に、

「いままた案するに、善導の自身は現にこれ罪惡生死の凡夫、曇劫よりこのかた、つねに沈み、つねに流転して出離の縁あることなき身と知れという金言にすこしもゆえに『歎異抄』にも

「聖人の常の仰せには、弥陀の五劫思惟の願をよくよく案すれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり。さればそくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんと思し召したちける本願のかたじけなさよと、御述懷そうちゅ

『愚禿鈔』は聖人の晩年における告白である。その下巻は、聖人の御領解である。そこに善導大師の釈文をあげて

二種深心をもつて聖人の胸中を披瀝せられているのも、全
くこれと同様の思召である。

かくの如く頂き来れば、更に何の新奇もなきようなれど
も、それは聖人の御教が普及したる今日の結果においてい
うことで、もし聖人の御教化がなかりせば、いかで我等、
罪悪を自覚し、絶対の救済を仰ぐべき。

もし世間的の言葉をもつて言いあらわせば、「拯濟無邊
極濁惡」ということは、罪悪の自覚と、これに対する絶対
の救済である。そもそもこの罪悪の自覚、すなわち我々こ
そは無邊極濁惡の凡愚底下なりといふ自覺を起すことが、
なか／＼出来ぬのである。然して自からこの罪悪の自覚を
して下されたのが、實に親鸞聖人の眞面目である。

二、法然上人と親鸞聖人

ここにおいて法然上人の御教化と、親鸞聖人の御自督の
関係を知らねばならぬ。

そもそも法然上人の御教化は「選択本願念佛」というこ
とをもつてつくされている。而してその主旨は、
「貧窮困乏の類、愚鈍無智の者、小聞小見の輩、破戒無
戒の人を救済し、一切を度せんがために、弥陀如來、法
藏比丘の昔、平等の慈悲にもようされて、造像起塔、智

いうことは、すこぶる穩當にして、且つ健全な思想である
が、信仰的見地より見れば、すこぶる橋慢、自惚の態度と
いわねばならぬ。もし出来得る限り、善を励まさるべから
ず、行を勵まさるべからず、戒をたもたざるべからず、觀
念をもなさざるべからず、というて、これが出来得るもの
ならば、仏は何が故に、造像・起塔・乃至・持戒・持律の
行を 押びすて給うべき。

如來すでに選択本願を建てたまひ昔において、かねて
知ろしめして、煩惱具足の凡夫、罪惡深重の衆生と呼びか
け給うにあらずや。しかるにこの選択本願に遇いながら、
あだかもあずかり知らぬが如く、これを他人事の如く思い
なし、たとい悪人にも助け給うなるべけれども、出来得
る限り善を励まんと言えるは、橋慢、自惚といわすして何
ぞや。

独り親鸞聖人にいたりては、その貧窮困乏の類といふ
わが身のことなり。「我身は現にこれ罪惡生死の凡夫、曠
劫よりこのかたつねに沈み、つねに流転して、出離の縁あ
ることなし」と深信せられたのである。『歎異抄』に

「その故は、自餘の行をはげみて仏になるべかりける身
が、念佛を申して地獄にもおちてそうらわばこそ、すか
されたりまつりてといふ後悔もそらわめ、いずれの行
もおよび難き身なればとても地獄は一定すみかぞかし」

慧広才、多聞多見、持戒持律等の諸行をえらびすて往
生の本願となさず、唯称名念佛の一行をえらび取つてそ
の本願となすなり」というのが選択集の精神である。いやしくも、この書を読
み、まのあたりこの御教化を蒙る者、これが了解出来ぬは
ずがない。

しかるにその意味はこれを了解するも、自分自身は、そ
の所謂、貪窮、困乏、乃至、破戒、無戒の者であるとい
う自覺を生ずることが甚だむつかしい。法然聖人の門侶三百
八十余人、いずれもこれを自分自身の上に頂いた人がすぐ
ない。これらの人々の心中におもうに、如何にも弥陀の本
願は罪惡深重の者でもたすける大悲である。かくいえばと
て、ことさらに罪惡深重にならねばならぬということはない。
勿論、法然上人の仰せの如く、たとえ悪人でも救い給
うなるべけれども、出来得る限りは善を励まさるべからず
行を勵まさるべからず、戒を持たざるべからず、というよ
うに考えて、法然上人が『選択集』に於いて血涙をふるつ
て、捨・閉・閑・拋の廢立を主張し、「たとい源空を死罪
に処するとも言はざるべからず」とのたまえる専修念佛の
真教を全く反古にしたる結果に陥ちいつたのである。

一応、道徳的見地よりいえば、たとい悪人でも救い給う
なるべけれども、出来得る限り善をはげまさるべからず、と

とあるのは、まさにこの選択本願の思召しを自身の上に頂
いて、わが身の程を知らされたる眞の落ち心地である。
譬えばここに名医ありて、「妙薬を発明したりとせんか
この妙薬は尋常普通のものにあらず、如何なる薬を以ても
療すべからざる、難治難癒の病疾に、特効全治の妙薬であ
る。今この名医より手すから、この妙薬をあたえられたる
時、もし病人にして、私は未だ難治難癒の病人にあらず、
なお他の医師、他の薬にて治せらるべしと思わば、何ぞ深
くこの妙薬を信じ且つ用うべき。これは妙薬なり、諸人た
すけなりと考へなば、折角の妙薬もその人自身のためにには
何等の効もないことになる。

然るに病人にして、この名医の手すから与えたる妙薬の
価値を言い知らされた時は、同時に必ずわが難治難癒の重
病者なることを自覺して、かかる全治の見込みのない者を
助けんと言う名医の親切に向つて、絶対の信頼をするの外
はない。

すでに我是難治難癒の重病人なりと知らば、この妙薬は
一般の病人のためではない。諸人助けではない、實に我一
人のためである。しかしてその妙薬のはたして特効あるや
否や、又その成分の有害なりや否やを證索するの要はない
我等如きの重病人を全治せんとの、唯一の妙薬なり、我も
用いつつあり、汝もこれを用うべし、と聞かば、これを信

ぜずにはいられぬのである。これ実に『歎異抄』に

「親鸞におきては、ただ念佛して弥陀にたすけられまい
らすべしと、よき人の仰せをかぶりて信する他に別の子
細なきなり、念佛はまことに淨土に生るるたねにてやは
んべるらん、また地獄におつる業にてやはんべるらん、
総じても存知せざるなり。たとい法然聖人にもかされ

まいさせて地獄におちたりともさらに後悔すべからずそ

うろう云々」

と本願醍醐の妙薬を頂かれて、我こそは難化の三機、難

治の三病なりと告白せられた所以である。

しかし、かくの如く、難治の重病を治する妙薬なりと云
わば、「薬あり毒を好みてよし」と、かく悪しき者でも助
かるものならば、まだ「罪悪を犯してもよいということ
を教えることにならぬかと懸念する者もあるであろう。こ
れは聖人も誠めたまし如く、邪見におちいつたものにして、未だ真に罪悪を自覚しない横着心からおこるのである

極濁悪を救わる故に、なお惡をしてよいというのは、な

自分はまだ極濁悪になつて居らぬということである。極濁

悪まではまだ餘地がある考え方である。餘程自分は高き處に
いるつもりである。

発現の趣は大いに異つて居る様なれども、悪しき者でも

銕と鍵との如くである。『和讃』に

五濁惡世のわれらこそ 金剛の信心ばかりにて

ながく生死をすてはてて 自然の淨土にいたるなれ

とある。もし通常の銕であるならば、通常の鍵をもつて
開き得べし。しかるに今、五濁惡世の強剛難化の銕前こそ
選択本願の金剛の信心の鍵ならではひらくことが出来ぬの
である。

然るに、法然上人の選択本願の鍵を授かりながら、我身
の強剛難化の銕たることを自覚せいで、五劫思惟の御苦
労が水泡に帰する次第である。

實に弥陀の五劫思惟の鍵は「そくばくの業を持ちける」
強剛難化の我等が胸をひらくためと頂き下されたが親鸞聖
人である。

この親鸞聖人の御自督は、即ち我等が頂くべき自督であ
る。『歎異抄』に

「さればかたじけなくもわが御身にひきかけて、我等が
身の罪惡の深きほどをも知らず、如來の御恩の高きこと
をも知らずして迷えるを、思い知らせんがためにてそう
らいけり」

實に聖人が御懲悔なされた罪業深重は、他人のことではな
い、即ち我等の罪業深重を知らせて下さるのである。聖人
が、親鸞一人がためなりけり、と頂き給いし、五劫思惟の
をも知らずして迷えるを、思い知らせんがためにてそう

助けて下さるが、成る可く善を勵むべしというのと全く同
様の橋慢の立場である。

要するに、その何れも、自分を中位に考えているのであ
る。そこで道徳的に考えれば「なるべく善を勵むべし」と
云い、邪見におちいれば「なお悪くともよい」というよう
になる。

さて、眞実の信仰を頂く時は、我こそは極濁惡である。
これより以上に悪くなりようがないのである。底下的凡愚
である、下の下である、地獄は一定すみかである。毒を好
む餘地がない、すでに毒をもつて満たされているのである
なるべく立つがよいとか、座つてもよいとかいうのは、な
お中腰でいるからである。

「極重惡人、他の方便無し」の我等は、すでに墮獄の極
倒れてしまつてゐるのである。この上に倒れようがない。
この極惡最下の衆生のために、極善最上の法を説かれたのが
選択本願、醍醐の妙薬である。

なお多少信仰に対しても側面觀におちるおそれがあるが、
聖人の眞面目を明了に頂くために、なお一つの時をあげて
みよう。

法然上人の御教化と、親鸞聖人の御自督とは、あだかも

御恩は、又我等一人々々のために待ちかねたまゝ御恩であ
る。これ実に「拯濟無邊極濁惡」の大德音である。

「さらに親鸞めずらしき法をひろめず。如來の教法われ
も信じ、人にも教えきかしむるばかりなり」

われ如き、難化の三機、難治の三病が、本願醍醐の妙薬に
よりて救いを蒙れり、汝等同病の輩、同じく本願醍醐の妙
薬を頂け。我如き強剛難化の銕前は、選択本願の秘鍵によ
りて開かれたり。汝等、五濁惡世の有情、選択本願を信ず
べし、と。

『信卷』の別序に「それおもんみれば、信樂を得度するこ
とは、如來選択の願心より发起し、真心を開闢することは
大聖矜哀の善巧より顯彰せり」とあるが實にこれである。
まことにこれ聖人九十年の間、つねにくり返し給いし御述
懐にして、法然上人の如來選択の本願の教化より、親鸞聖
人の「聞其名号、信心歡喜」と信樂開發したましい、一念
の実驗である。

ここにいたつて「信樂開發の一念」ということを注意せ
ねばならぬ。聖人は、「大經」の願成就文を「信心歡喜、
乃至一念、至心に廻向したまえり」と訓ぜられた。これが
實に如來廻向といふことの源である。

私は青年に分かり易いように、実験ということを言う。

実験というは、直接に我等が心中に、如來の大悲が徹底攬入して、信樂開発の一念、広大難思の慶心を生ずることである。

聖人が如來廻向と仰せられるは、全く直接、如來清淨願心が、我等の中に達して、一念喜愛心を生することである。そもそも、この廻向の実験なかりせば、上來のべ來りたる聖人の真面目、即ち罪惡の自覺とともに、大悲の救済をこうむるということは出来ぬ。

全体親鸞聖人が、ひとり法然上人の選択本願そのままを我身一人の上に頂かれたのは、法然上人の教化の下に、直に如來廻向の恵みに接せられたからである。

法然上人の教を蒙つて、戦々競々、その教にたがわんことをのみ是れおそるるという有様なれば、畢竟、律法的の從順である。

「一心專念弥陀名号……順彼仏願故」というのは、本願に念仏せよとあるによつて、念仏せねばならぬという意味ではない。若しそうであれば、服従的態度である。法然上人の手真似、口真似である。

「順彼仏願故」というは、律法的服従でもない。信仰的の信順である。法然上人の言の下に、直に如來の本願に信順するのである。如來の願心が徹到して從わねばならぬよ

て廻向したまうことせられた如きは、曇鸞大師の示された、他利利他の深義そのままにして、法然上人の廻向、不廻向といふことも意義を一変して、念仏は行者の方よりは不廻向であるが、如來の方より廻向であると、御示し下さられたのである。『教行信証』が願力廻向を骨子として組立てられたのもこのわけである。

さて聖人は如何にして廻向を頂かれたかといふに、即ち聖德太子の御手引を味わねばならぬ。そもそも聖人十九歳の時、磯長の聖德太子の御廟に参詣したましいし時、蒙られた六句の偈は、聖人をして著るしく人生問題において御苦勞せしめ奉つたのである。ことに、「汝の命根、応に十餘歳、命終して速に清淨土に入る」との靈告によつて思召すには

「一息遂がざれば千載に長く往く。何ぞ浮生の交衆をむさぼつて、いたずらに仮名の修学に疲れん。すべからく勢利をなげうつて出離をねがうべし」としきりに道を求めたまうた。

されど、色塵・声塵・猿猴の情なお忙しく。愛論・見論

鶴膠の憶いよ／＼堅し。遂に根本中堂、枝末の靈巒に詣で、よくに聖德太子の建立にして、その本地なる六角堂の如意輪觀世音に詣して、百日參籠の曉、靈告を蒙り、帰路、四

うになるのである。

他の門侶は、法然上人に対する律法的の從順である。故に形は合つてゐる。念仏は仰せの如く称えてゐるが、惜しいかな、法然上人の御精神なる選択本願を頂いていない。

而して、この如來の願心を直々心中に頂いたのが、聖人の廻向の実験である。そこで聖人の御信心は法然上人の示されたる選択本願を信ぜられたに違ひないが、その信樂開発の実験ということなかりせば、法然上人の選択本願が親鸞聖人の信心そのものとなることが出来ぬ。

三、聖徳太子と親鸞聖人

この如來廻向の実験そのものについては、聖徳太子の御手引といふことが、非常な関係をもつてゐる。

聖徳皇のおあわれみに 護持養育たえずして

如來二種の廻向にすすめいれしめおわします

と『太子和讃』にあるが、實にこの点である。聖人が流罪

以後、愚禿親鸞と名告り、ことに天親・曇鸞に私淑し給い

し所以のものは、聖人が聖徳太子の引導によりて法然上人

の教化を蒙り、内心に実験された大慈大悲が、全く天親・

曇鸞の示されし往相還相の廻向そのまであるからである

ことに廻向といふことを普通に言う如く、衆生より仏に

向いて廻向する意義を一変して、如來より直に衆生に対し

条橋上に聖覧法印に遇いたまい、その指導を得て、即日吉水の法然上人の禅房を叩いて、初めて選択本願を聞き給うた。

ここに多年の間、御苦勞なされし胸中の無明は、無碍の光明によつて一時に照破せられ、圓融至徳の嘉号は、忽ち多年の志願を満足せしめられた。これ即ち、信樂開発の一念にして、如來の廻向にあずかりたまうたのである。

『口伝鈔』にある聖光上人が法然上人にお遇いなされた場合とくらべると、如何にも著しい対照である。

又もし修養學問の立場より法を求めるときは、如何に、如法、從順に、師命に従うても、修養學問を捨てるることは出來ぬのである。是れ鎮西上人が本願にえらび捨てられたる諸行を雜え行うた所以である。

しかるに、人生問題より進みて尽十方無碍の光明に照され、唯一の念仏圓融し来るときは、専ら大悲に感泣する外はない。如何にも何れの行も及び難きことを自覺するのである。如何なる煩惱をも具足することをも自覺するのである。

私自身が御慈悲を喜ぶ身となつて後五年、初めて『教行信証』を味いし時、大いに驚嘆したのは『信卷』の終りに引用したまえる『涅槃經』の阿闍世王が煩惱入信の文である。一々の文句、ほとんど自己の胸臆をえぐらるるの感が

晩年或る日の聖人

福島政雄

1252
聖人八十

建長四年秋の或る日のことである。京都西の洞院の片ほ
とり、ささやかな庵室ともいうような住居、静かな一室に
親鸞は今日も机に向つて一心に何かを書いている。東北の方
方、比叡の山には夕陽の光がさしてある。暫く書いていた
筆を擱いて比叡の峰を仰ぐ八十八歳の聖人、顔は平和の光
に輝いている。

やがて隔ての襖がスーと開いて、そこに手をついたのは
父上の老年に甲斐々々しくかしづいている覚信尼である。
「お父様、お書きものにお疲れでございましょう。お茶
でも入れましようか」

「ありがとうございます。八十歳の老年になつても静かに述作を続
けることが出来るのは、お許のお陰だ。また関東の御同
行達のお蔭だ。そしてそこには弥陀大悲のお力をえがあ
る。お母様が越後に離れていられるのは淋しいことであ
るけれど、併し大悲の光の下に一つに照らされ、その御
名のひびきをお互に感じている。有り難いことだ。南無
阿弥陀仏！」

「お父様。私もまことに有り難く感じています。親子が

「お父様！お茶を入れて参ります。しばらくお持ち下さ
います」

覚信尼は次の間へと立つた。

あとで親鸞はひとり考へる。血脉相承か、法脈相承か、
これは考へるものである。善鸞には法の血は流れていない。
病氣平愈の祈禱をしたり、つまらぬ御符を病人にのませた
りしている。その外飛んでもないことを言いふらしている
模様である。噫、親子の間でありながら、なぜ信心が通わ
ないのであろう。併しかよに考へるのも自分の愚痴であ
る。信心は、自分の方で他に伝わるものではない。ひとえ
に弥陀の御催にあすがつて信心は起る。親子の間と言つて
もどうにもなるものではない。此の親鸞は我が子善鸞を親
鸞自身の宿業として負うて行くより外はない。無限の苦し
み、そこからお念佛、称名が湧き出て来る。

一体此の親鸞は、如何にも信心の人であるかのような顔
をしているが、本当の信心があるのだろうか。おもえば法
然上人様から我が心を開かれてお念佛申すようになつてか
ら、五十年あまりにもなるのに、自分の心は相変らず、貪
瞋邪偽ばかりである。

淨土真宗に帰すれども 真実の心はありがたし

虚偽不実のわが身にて 清淨の心もさらになし

こんな心持が次第に深刻に、歌となつて胸底にひびいて

一つ信仰に生きて行くということは、何という有難いこと
でございましょう。それにつけても、善鸞兄様のこと
が思われなりません。お父様も兄様のことではどれほどか御心痛遊ばされたこととおもいます」

「本当に、善鸞のことでは、今なお血を吐く思いをして
いる。関東の同行への申しわけに善鸞義絶の手紙でも書
こうかと思うが、しかし親子の間といふものは切つても
切れるものではない。夜の夢に、時々あれのことを夢み
ることがある。迷信に囚われた善鸞のあわれな姿を夢に
見て、おもわず夢裡に哭くこともある」

「お父様、それは御もつともござります。私にもその
お心持はわかります。併しお父様、此頃参つています如
信は、兄さまの子でありながら、正しい信心の道に入る
素質があるよう見えます。これを御楽しみにお育てな
されませ。必ずおじい様の御信心を受けつぐようになり
ましよう」

「どうぞ、そうなつてくれると嬉しいが、まだ十一三歳
の如信、さきゞのことは何とも言えないだろう」

来る。こんな心を持ちながら、人に信仰を伝えるなどとは
大それたことである。此の京都の片隅に晩年を送りながら
せめて如来を賛嘆し奉る歌だけでも死後に残しておきたい
如信、これは大変に素質が善いようである。大悲のおま
ことか如信に徹して下されば有難いと思う。さすれば血脉
相承と法脈相承とが一流れになる。そして子々孫々まで此
のようにして継けば良いと思うが、併しこれも我ままの考
で、血脉の子孫、必ずしも法脈を嗣ぐものではあるまい。
三百年、五百年、七八百年の後はどうなることかわから
ない。結局何もかも如来に御まかせするより外はない
ここまで考へている時、また襖がスーと開いて覚信尼は
お盆に茶菓をのせて入つて来る。そして父上親鸞の前に静
かに座る。

「お父様、お茶を召しあがり下さいます。何だか大変考
え込んでいらつしたようなお顔でござりますが、お茶を
召しあがつて、少しでも御氣をお晴らしなさいませ」
比叡の峰の残照は消えて、西の空に美しい夕やけ雲が映
えている。聖人は慈愛の眼ざして覚信尼を見ていたが、や
がて眼を西の空に転じて静かに語る。

「父はいま信仰の心持や、今から七八百年後のことまで
考へていた。信心を伝えるなどということは、自分の力
で出来るものではない。すべては如來の御はからいであ

る。自分としては、昨年頃から心の中にお淨土の音楽とでもいうようなものがひびくのを感じる。あの夕映え雲の彼方というわけではないが、お淨土のことがはつきりと感ぜられる。此の感じからお淨土讃嘆の歌を作つて見たいという心が湧いて来ている」

「お父様、それは大変ありがたいことでござります。私はまだお淨土の音楽は感ぜられませんけれど、如来のお慈悲の中にお淨土は感ぜられます。お父様、その音楽に合うような歌を是非ともお作り遊ばしませ。私もその御歌に導かれてお淨土の音楽をきくようになりたいと思ひます」

「そう言わるれば、此の父の心が大変美しそうにきこえるが、そんなことではない。釈尊の御教では、ただ徒らに音楽芸術に耽れば、懈慢界に墮落すると言つて戒められてある。自分の現実の姿を忘れて、美に酔うたような心持になつては駄目であるという御戒めである。此の父親鸞の心には八十の歳になつても、貪瞋邪偽の煩惱が湧き立つてゐる。奸詐百端、この身に充満しているといふ有様である。このすがたは如來の光明に照らされて見えて来たのである。慚愧にたえぬ姿である」

「お父様、そのお心持も私にわからないではございません。女の身として、釈尊が女に対する御のこしになつて

覺信が持つて来た茶菓をおし戴かれる。日はようやく夕暮れとなつて来る。どこのお寺の鐘かゴーンとひびいて来る。覺信尼は心の底まで染みとおる父上の御教訓という感じがして、静かに次の間へとひきさがる。

あとで聖人はまた考えられる。

幼少の時に父上にも母上にも永遠のお別れをした自分は、叡山二十年の修行の間にも父母といふことが中心問題であった。しかも自分の性格は相當に鋭くて、真実信を求めるところについては少しの妥協も出来なかつた。叡山では外面だけは戒律を守りとおしたけれども、内心の煩惱はどうにもならず、聖徳太子様へのあこがれ心から、穢長の御廟に参つた十九歳の秋、あらためて決死の覚悟をして叡山の修行をお十ヶ年続けたけれども、煩惱の雲は晴れず、二十九歳の春、六角堂の參籠で不思議の夢のお告を得て、法然上人様の吉水の御庵室への縁が開け、お念佛申す身となつたことは、まことに不思議の御縁といふより外はない。

併し考へて見れば自分の鋭い性格はなかなか和らがなかつた。あの信の座、行の座のこと、今おもいかえして見れば驕慢の極みの行であつた。行の座についた人々はすべて駄目だ、自分こそ信の座の第一人者と思ひあがつてゐた。そして上人様が信の座に御つきになつたのを見て、自分こそなお更得意になつていだ。何という慢心の姿であつた。

いる数々の御誠めも身にしみています。玉耶女に対しても御訓説もよそごとでない感じであります」

「お許はまだ若い。今から五十年も生きていて、此の父の年令に達したならばわかるだろう。老人といふものは一方では感じが細くなるが、他方では厚かましくなる無慚無愧という言葉が如何にも適切であると思う。感じが細かくなると厚かましくなる心持とかち合つて、そこに何となく心の無理が起る」

「お父様、お父様にも心の無理がござりますか。私は若いので色々心の落着きがないと感じていますが、お父様がそんなであらせられるとは思いがけないことでござります。お父様をお見あげ申しますれば、いつも静かに平和なお顔で、お心に御無理があろうなどと思はれませんのに」

「いや、外面は落着いているよりに見えるかも知れないが、内心は言語道断、蛇蝎のような有様である。内心は愚かであるのに、外面には賢そうな顔をしている。本当に此の父は偽善者であると思う。あゝ、法然上人様などはこんなではなかつた。愚痴の法然房、十惡の法然房などと仰せられて、外面は愚かなような御様子をしていらせられたが、内心は何とも言えない賢いお方であつた。噫」

ろう。

その後に越後から関東に移り、子供も次々に出来て苦労するようになつてから、親といふことが痛切な問題となつた。親らしくもない自分、それが如來の久遠の御慈悲に哺まれてゐる。そこに光明の母、名号の父が感ぜられるようになつた。幼少にしてお別れした父上は永遠の御よびかけの声、また母上はどこまでも照らし温めたまゝ光であると気がついたのは、五十歳に近い頃であつたろうか。

呼びかけられ、温められながら、今八十歳に達している自分、性格の鋭い、他人を批判し勝ちな自分は、此の年令になつても無理のない平和の心にはなかなかになれず、法然上人様のような自然法爾といふ境地はまだまだ自分には遠いことと思う。

人生五十と言い、または人生七十古来稀と言われているのに、自分はもはや八十という齢に達している。法然上人様は八十歳でおかれになつたのに、五十幾歳の御時からあの円満なお心であつた。此の世の過ぎむようは念佛の申されむようにして過ぐべし。聖にて申されば妻をもうけて申すべし、と常に仰せられていたが、御自身は全く聖の御生活であつた。御一生は清い泉のような御生活であつたそれに比べると、此の親鸞の生活は、泥沼の泥のような生活である。まことに何とも言はれない。併し泥の中から美

しく咲き出でる白蓮華のよう、この泥沼の親鸞に御名がひびく。無限の有りがたさ、また不思議の極みである。

「お父様のお膳を持つて静かに入つて来る。尼は夕餉のお膳をいたしました

「お父様、今夕は珍らしく他から川魚をいただきましたどうぞお召しあがり下されませ」

「ああ、これは有り難い。此の父は仏法者と言ひながら肉食をして妻帯をしている。あの教信沙弥は肉食妻帯、

労働の生活をなされた方であるが、その真似をするといふのではない。先達として尊敬している。そして法然上人様の御教の下に、こんな生活をしているが、これもまた

ことに無慚無愧の生活である。この父は越後時代以来の愚禿人である。食うために寺に入るものといつてある涅槃經の禿人、あのお経をしみじみと読んで以来、自分こそ禿人であると感じている。本当の仏法者でも何でもない。釈尊の御教を食いものにしている無戒名字の比丘とは自分のことである。此の自分が日々の養いを載いている。有り難いとも何とも、ただお念佛申すばかりである南無阿弥陀仏！」

「お父様！お父様は本当に有り難いお方と感じます。いつも心を以て物をお受けになります。身をもつて教を受けておいでになります。お父様の子として私もその心

報恩の生活

三 瓶 德 英

今年は親鸞聖人七百回忌に当り、有縁の人々は種々な感想が湧くことと思ひます。

宗教の教化によつて各自の信念を固め、安心と満足の生活をする人は、数多い事と思ひます。私は近角常観先生の

御教化を蒙り、親鸞上人の御教に救われて、愚悪な私が安かされて来ました。勿体ない、有難いと思う心から御恩の幾億分の一でも御報謝になる事は出来まいかなどと考える事もありますが、何事も出来ません。

報恩の生活などと云えは、現代青年の中には極度に反抗し嫌惡する人がいるかと思ひます。

近角先生は、信仰に徹底せぬ者には報恩の思想は起らぬと仰せになりました。

時代の変遷は目まぐるしく吾人に迫つて来ます。殊に現今の世相は、唯物論的、物質主義、科学万能、宗教無用等の思想が益々悪化して、経済の如く、強き者は弱き者を屈伏し、相互に殺し合い害し合い、食うか食われるかの行動

を受けつぎたいと思ひます。お父様のお教を永遠に伝え るようにはたらいて参りたいと思ひます」

「その心持は誠に有り難い。父の寿命もここ数年の間であります。父は死後も、如來の恩十方の無碍の光明と一味になつて、永遠にはたらき続けるであろう。お許はこの世に残つてどうか仏法弘通の御縁を作つてくれるよう に信心の起るのは如來の御催してあるけれども、その御縁を作ることは出来る。お許は誠によい心がけがある。どうぞこの父の志を受けついでもらいたい」

覚信尼は慎んで沈黙の裡に父上の心を受け容れている。夕餉がすんで、お膳をさげる覚信尼の眉には尊い決心があらわれている。

聖人はあらためて机に向かわれる。御本書の原稿が机の上にひろげられている。やがて静かな読誦の声がきこえる大悲の願船に乗じて、光明の広海に浮みぬれば、至徳の風静かに、衆禍の波転ず。すなわち無明の闇を破し、すみやかに無量光明土にいたりて、大般涅槃を証し、普賢の徳に導きなり。

聖人の合掌のすがたが見える。秋の一日はしづかに暮れて行く。

(昭和三十二年八月十五日稿)

を行ひ、惡逆無道の生涯を終る大惡人を、憐れみ愍みて、南無阿弥陀仏の大善を以て救済したまうことと知らせて下さつたのが親鸞聖人であります。

近角先生は、思想問題で最も危険なのは独断である。我是絶対に正義なり、衷心より忠誠なりと独断し、行動して省る所がないことは、甚だ遺憾なことだと申されました。凡そ人間には絶対なるものは無く、凡事方端、相対五分々々ばかりである。政治、經濟、労働等の社会問題が、紛争その跡を絶たず、しかも現今は著しく混乱し、その頂点に達せんとしているようと思われる所以あります。

更に。左傾も右傾もいけない、我は中立なりと力む人々も大部分は日和見の御都合主義で、狡猾な、不眞面目な、無定見、無秩序、妥協等の混沌界を彷彿するに外ならぬ様に思われます。かような人々もここに心機一転して、かかる世の中から、如何にして秩序を見出すか、不易の真理を発見すべきかについて、親鸞聖人の教を聞くべきであります

す。

唯円房が書き遣された歎異録に、聖人の御言葉を「頃凶具足のし夫、火宅無常の世界は、よろずの

「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろすのことみなもてそらごとたわごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞ、まことにておわしますとこそ仰せ候いし」と書かれています。この念仏は、如来廻向の念仏で、信樂開発の曉、仏恩報謝の念仏となるのであります。

木文男のこゝに、金剛の信心が、大いに發揮されてゐる。金剛の信心とは、憐みと悲愍の心である。金剛の信心は、絶対の大慈悲で、これが如來であり、念佛であり、他力金剛の信心で、徹底せる信仰であります。ここから再び相対界に現われて、智慧の念佛と共に活躍して生きて行くのであります。

顧れば、五十年の昔、明治四十四年の春、宗祖六百五十九回忌の時は、西本願寺役員の末席で、大法要の事務に参加した頃の種々の思い出が蘇るのであります。

工事のため袋中庵の土地は大部分取り上げられたとのこと
をきいて憤りを感じました。南側に向つて拡張したので歴
史的由緒のある庵が潰れる、これを北側に向つて拡げたら
名刹名園は保存し得たであろうに、大京都の殆んど全部が
一望の中に瞰下することが出来たよい所であつたことが惜
しまれます。

和夫田貞の徒歌に

小室さくらの庵

はいが、如しく申しあげられ

を思い出しました。

又飛行機を思い出します。六百五十回忌大法要の真最中、京都島原の広場で、米国人スミス氏の飛行機の実演を見るため入場料（五十銭）を払つて、日本ではまだ飛行機を見た事もない沢山の見物人が押しかけ、滑走、離陸、宙返りなどの、はなれわざを驚いて見たのでしたが、五十年後の

今ば、隔世の感があります。私は昔、親戚の海軍大佐の者が、乗物の中では、飛行機が一番に乗心地がよいと云いましたことを思い、数年前、名古屋から羽根田まで旅客機に乗せて貰らい、大佐の言を実感しました。

ざ／＼誘いにきたとのことで、私は行きたくて、行きたくてたまらぬけれども、宿直を代つて貰う人もなく、地団駄でたまらぬけれども、宿直を代つて貰う人もなく、地団駄で

てたまらぬけれども、宿直を代つて貰う人もなく、地団駄ふむ思いで好意を謝して辞退し、黒書院でも眠られず、読書し乍ら叡山の法悦を偲んだことが忘れられません。

又、利井明朗師、八十四、五の御年の時、執行長になられ、執行所の御内仏で御法話の時、西大谷の前下の、袋中

庵の御話を聞いた事が忘れられません。略記すれば、昔禅僧の袋中行脚の時、或る大きな寺に泊り、本堂の後ろの一室に臥床したところが、夜遅く、二時、三時の頃、本堂が騒がしく、暫くして静まる。またそれを繰り返す。袋中不審に思い、起き上がつて、ひそかに本堂内を見れば、仏前に立派な棺が置いてあるが、人は一人も居ない。するとその寺の大和尚が、金欄の七条を着て一人入り来たり、棺の蓋をとり、ニヨニヨしながら死人の頭をなめ、キスをする。暫くして蓋をして、ニヨニヨしながら庫裏へ帰つて行く。この有様を見た青年僧は、旅装を整へ行脚し、真剣に修行し、研磨して高徳の禅師となり、西大谷の下に庵庵を作り自行化他をしたというお話で、何宗でも、寺院の僧侶が、葬式や法事のみで生活する者は、仏法を破滅する獅子身中の虫であるの御諭しでありました。

私は一昨年上洛し、西大谷へ参りました時、眼鏡橋の下から、五条通りの街巾を大拡張中でありましたので、近所

思い出はつきませんが、私は今年、祖師の御正忌中に愚考して、左記の通り謄写版刷を作りました。

今年 親鸞聖人七百年忌記念に報恩の会合を始めて見たく
思い左記の提案をする。

一、名称 真宗实行会

一、目的 本会会員は、真宗の教行を聞信し、親鸞主義に依り社会生活をなす

一 目白達成の方法

イ 每月一回法話会を開き他力信仰に徹底すること

男女老少何人にも実行し得る事項を協定し

卷之三

はきもの
園は 第一次実行事項の提案

履物を向うむきに、ぬぎはきする事

一、一人でも数人でも趣旨に同意し会合して下さい。

偶成。会而非会 非会而会 万人随意 称名實行

○ 私は馬鹿だにえらいと思うて、愚痴や邪見にあけくれる。

○ 一生造悪わたしの因果 可哀想にと御開山

○ 罪も障りも功德にかえてまもりたする阿弥陀様

右刷物を有縁の御同朋に差上げ、少しは反響を感じました。将来実行協定の提案として、朝夕仏前礼拝、念珠を潜め持つ、相互の挨拶、冷水摩擦、など云いたいと思います幼稚園時代から一生を通じて各人が身心健全に報恩の生活なさる様にと希望して、露命枯草の私のたわごとを綴つて見ました。南無阿弥陀仏。

讃 唱 歌

伊 藤 千 夫

奇特なる信心の行者こそありけれ。越中の人に、井沢清次郎となむ云えり。事は『求道』三の巻四号に記されたり。

実に信心の行者ほど嬉しく有難く覺ゆるはなし。即ち尊き仏縁を讚して、いささか懷を詞章に寄す。

久方の天の仏のみめぐみをただ悦べの言の尊さ

み仏の大きめぐみの計らいの内に迷はずあれのみ教え人心あやふきものと思ひ知り尊き御名をせめて申すも吾がこころ暗くしあればみ仏の光こほしみ止む時もなしよき人の心とほれるみ教に吾世百年樂しきを経め物思ひの悲しきことをみ仏に聞こえ申して熟寝せるかも

吾が為す事のことごと何事も大きめぐみに漏れずとを知る
大海の水掬ふなす報もとみ庭の草を根も揩かず抜く

日を一日異思もなくみ庭べに草抜く賤を照らし給へり

青嵐都を立ちてみ仏のみめぐみよろこび帰らく吾は

古郷の若葉青葉もいま更に吾に樂しえ慈悲を恋ひつつ

み仏のみめぐみ嬉しく有経れば心常滑さやるものなし

明治三十九年、六月、「求道」

三月六日 独 鶯 を 聞 く

青山の垣のまほらによろづ代といます御仏大きみほとけ蒼空を御笠と著せるみほとけのみ前の庭に梅の花さく

明治三十五年 詠

あたたかき心こもれるふみ持ちて人思ひ居れば鶯の鳴く
このあした小雨の庭に鶯やわが嬉しみをゆりつづ鳴くも
をさなげに声あどけなき鶯を

うらなつかしみおり立ちて聞く

片町にたなごころなす我庭を

あな怪しもや来鳴くうぐひす

鶯や吾家を近く汝が声のうひうひしきに我れまけはてぬ

むみ仮の尊く放つ御光を仰ぐすなはち罪はろぶとふ

みもそそに手をふりしかば全き身の

血汐し澄める心地しにけり

こしかたのかさなる罪も御仏の光に浴みて消えざらめやも

あとがき

この春は、聖人をお慕いする人々で、京都は渦巻いていることでしょう。草庵籠居の身も、新聞、雑誌、書信を通じて、感慨無量のものがあります。

又、六百五十四忌、明治四十四年頃に、近角先生が、聖人の真姿を拝されてお話し下さいました「親鸞聖人の真面目」は、求道誌にも、信界建現誌にもお掲げ下さったもので、七百回忌の今日、あらしく記載させて頂きました。念佛の行者の右と左に観音、勢至の二菩薩が、寄り添いたまうと承りますが、聖人は、聖徳太子と法然聖人に、二菩薩の影現を仰いで、生涯の御引導を蒙つて居られます尊容があきらかに知らされますことあります。

かねて頂いておりました福島先生の「晩年或る日の聖人」を記載させて頂きました。古稀を過ぎられた先生のお心に影現される聖人の面影であり、おもむきの深いものであります。

三瓶町のお原稿は、八旬に及ばれる御身で、いよいよ師恩仏恩を湯仰されての信味のしたたりであります。御遠忌を我が生活

の上に頂く、よき範を示して下さいました

御遺忌は、「これですんだ」でなく、これから真剣なものがはじまる、その「スター」ト」であります。丁度それは、都会に働きに出ている子等が、盆や正月に田舎の父母の家に帰つて、身も心も温められて、再び元気よく働きに出かけるように！

私は今年五十七歳。丁度六百五十四忌の大遠忌のあと、聖人々の声の随所にひびいている頃に青少年期を迎え、真言宗の在家に生れた身にも、聖人の德風に浴し得る御縁を頂いたのであります。そしてこの四十年は、祖聖をただひたぶるにお慕い申して、聖教に、御伝記に、御遺跡に、余香の片鱗をもと願つて参りました。私共の是非善悪を越えて、全理解して下さるよき人、そうした方が限りなく慕われてなりません。

毎月一、二、三日曜午後一時半、一道会。
第一日曜、歎異抄。 第二日曜、正信偈。
第三日曜、隨感。

毎月廿四日午前午後、市内昭和区小桜町、教西寺、法話会。

御案内

落葉の坐を定めるや窪たまり 井月

定価一部	二十円（送共）
半 年	百二十円（送共）
一 年	三百四十円（送共）

名古屋市南区既上町二ノ八八
編集・発行人 花田 正夫
名古屋市千種区千種町馬走二八
印 刷 人 本田 政雄
名古屋市南区既上町二ノ八八
發 行 所 慈光社
振替口座名古屋一〇四七〇番